

葬送 儀礼

の現状を考える ⑤

葬送儀礼の現状を

「場所」と「音声」から考える

浄土真宗本願寺派 総合研究所

浄土真宗本願寺派総合研究所では、めまぐるしく変化する葬儀の現状について、TV・新聞・雑誌などのマスメディアを始め、論文やシンポジウム、講演など情報収集を行い、分析を試みています。また、葬祭業者を対象とした聞き取り調査も実施しました。これらの成果をもとに、前号に引き続き、今号、次号にわけて、報告させていただきます。

調査や資料の分析作業のなかで、葬送儀礼は、執行する場所、僧侶や遺族・参列者によって、さまざまな様相をみせる

ということがわかりました。特に葬祭業者や現場の僧侶の方々からは、葬送儀礼を行う「場所」の捉え方と僧侶が行う勤行や法話などの「音声」について、工夫や問題点を指摘される声が多く確認できました。

今号では、この「場所」と「音声」を中心に取り上げ、葬送儀礼の現状から何がいえるのかについて考察したいと思います。

1、葬送儀礼の現状を

「場所」から考える

■葬送儀礼における「場所」の変化

近年の葬送儀礼には大きな変化が2つ挙げられます。1つは遺族や近隣住民によって担われてきた葬儀の役割が、葬祭業者によって代替されるようになったこと、もう1つは、葬儀の場所が自宅から葬儀会館へ移行するという場所の変化です。特に後者は都市に限らず、農村・山村・漁村など、いたる所に葬儀会館が開設され、そこで葬送儀礼が執行される風景が当たり前のようになってきました。1980年代、1000軒未満だった葬儀会館が、2014年現在では8000軒近くになっているというデータもあります。このように自宅から葬儀会館へと「場所」が移行している訳ですが、それに伴って大きく変化しているものがあります。それが各地域に伝承され根付いてきたいわゆる「習俗」です。

■各地に根付く習俗の「消滅」

日本全国の各地域には、実にさまざま
な習俗があります。例えば、遺体を火葬
場へ見送る際に行う「茶碗割り」、遺体
の入った棺桶かんおけをまわす「棺桶まわし」な
どはその代表的な事例です。また、35日
の中陰ちゅういんにあわせて、草鞋わらじに滑り止めと
してあんこを塗るものや、葬儀を自宅で
執り行った後、棺桶を軒下のきしたに落とす「棺
桶落とし」など、特色ある風習を聞くこ
ともあります。この他にも習俗はいろい
ろありますが、その多くが、民俗学など
で「ケガレ」と表現されるような、「死」
を避けるべき畏怖いふの対象と捉える死生観
が背景としてあり、各地域に根付いたも
のといわれています。

2015年11月下旬、習俗や民俗を調
査研究している国立歴史民俗博物館の関
沢まゆみ教授を訪問し、葬儀の現状につ
いてお話を伺うかがいました。関沢先生による
と、1990年代以前の葬儀は、血縁・
地縁の関係者が中心となって執行してい
たが、1990年代に入ると葬祭業者が

取り仕切るようになり、2000年代に
入ると全国各地で習俗が無くなりつつあ
るといふ事実を教えてくださいました。
これまでも、土葬から火葬に移行するな
ど、葬儀に関する変化は多々ありました
が、なぜ今になって習俗が消えているの
か。その理由について関沢先生は、「葬
送儀礼を行う場所の変化」であると指摘
されました。

そもそも葬送儀礼は、自宅で行われる
ことが大半でした。「日常」の空間であ
る自宅で「非日常」の葬送儀礼を行って
いたのです。そこで、「非日常」からま
た「日常」の空間に戻す作業として、さ
まざまな地域で習俗が行われていたと先
生は述べられました。それが会館で葬儀
を行うようになると、「日常」に戻す習
俗は不必要になってしまふ。ここに、習
俗の消滅する原因があるのではないかと
先生はみられています。さらにこの習俗
の消滅は、日本人が従来もっていた「死
生観」にも影響を与えているのではない
かと指摘されました。

■葬送儀礼の「場所」から、今後の展望を考える

真宗の「習俗」も各地に存在します。
真宗の習俗は、もちろん上述のようなケ
ガレ観に基づくものではありません。例
えば、親鸞聖人のご命日にちなんで毎月
16日に精進料理しょうじんを食べる習慣や、葬儀
の際に亡き故人の往生おうじょうを祝う赤飯と死
別の悲しみを表現するものとしてからし
汁が振る舞われるなどは、その代表的な
ものといえるでしょう。一方で、「門徒
もの知らず」で知られるように、真宗門
徒は迷信めいた事柄を行わないというこ
とも、真宗の習俗の特徴として考えるこ
とができるでしょう。

「習俗」とは、人間の本能的反応に由
来する慣習が制度化され、集団を規制し
統合を強化する機能をもつものと一般に
説明されますが、一言でいえば、「社会
のならわし」と表現されます。仏教的な
習俗も各地域に根付き、さまざまな行事
に伴って、親から子へ、先輩から後輩へ
と今日まで継承されてきました。確かに
「習俗」は、真宗のみ教えと齟齬そごをきた

すものが多いことも事実です。しかし、「死生観」を形成する制度として機能しており、何よりも日常の生活と密接であるという点に関しては、み教えを伝える上でも重要な要素といえるでしょう。

葬送儀礼を執行する「場所」が会館へと移行し、従来の「死生観」が変化してきている今、あらたな「習俗」が求められ、それを構築していく契機であると思われることはできないでしょうか。現在、葬送儀礼の場において、仏教讃歌「み仏にいだかれて」が唱和されている光景が広がっています。また、通夜や葬儀にて「正信偈」を参列者と一緒にお勤めする工夫がなされていることもよく聞きます。このような事例は、現代の葬儀事情のなかで失われていく宗教的感性の醸成を促しているところとみることができるでしょう。こうした行為が「習俗」化（ならわしとなること）することで、真宗の「死生観」を伝える「場」としての葬送儀礼があらたに形成されるのではないかと考えます。

2015年3月に刊行された浄土真宗

本願寺派編『いのちと死をみつめて vol. 4

ごえん〜結ぶ絆から広がるご縁へ〜』では、葬儀の場について次のように示しています。

葬儀の場とは、先立たれた方とのご縁、故人と出あった人々とのご縁、そして仏さまとのご縁という3つのご縁が結びついていくところです。そして、3つのご縁が出あうところに、葬儀の宗教的な意味が生まれてきます。（1頁）

現代の状況にに応じて、先立たれた方とのご縁、故人と出あった人々とのご縁、そして仏さまとのご縁が結ばれる葬送儀礼の「場」となるよう、日常からはたらかけ、浄土真宗のみ教えや考え方が各地の「習俗」として根付くような活動が求められているのではないのでしょうか。現代の葬送儀礼の場に、宗教的な意味合いを改めて問うていくためには、日常の行為やはたらかけから見直すことが大切なことだと考えます。

2、葬送儀礼の現状を「音声」から考える

■交錯する「音声」

葬送儀礼の「場所」にはさまざまな「音」が存在します。それはそこに集まる「人」の発する「音声」とも言い換えることができます。悲嘆の声・涙する声・偲ぶ声・読経の声、法を伝える声、まさに葬送儀礼はさまざまな音声が交錯する場所といえるでしょう。

葬送儀礼における音声に注目して僧侶の役割を考えた時、遺族の方は僧侶に何を求め、何に期待しておられるのでしょうか。当研究所では2013年に、葬送儀礼に関する各葬祭業者への聞き取り調査を実施しました。そこで僧侶に求められているものとして挙げられたのが、「勤行」と「法話」という2つのポイントでした。

■葬送儀礼における「勤行」

近年、家族葬や直葬の増加などを通して、著しく葬儀の形態が変化しています。なかでも宗教者を招かない直葬の増加は、現代の葬儀問題を語る上では避けることのできないものといえるでしょう。しかし葬祭業者への聞き取り調査では、直葬をなされた遺族の方が、「故人をしつかりと見送ることができなかつた」「お勤めの一つもすることができなかった」という後悔の念にかられて、後に僧侶を招いて勤行を希望される方が少なからずいらつしやる、という実態が明らかになりました。加えて「宗派の作法に則った、丁寧な勤行」を、遺族の方が望まれているとの声も聞かれました。

このこととも関連しますが、昨今、インターネットを窓口にして、葬儀や法事に依頼された僧侶を派遣するというシステムが話題となっています。その背景には、そもそも僧侶や寺院とのご縁をもたない方々の増加や、経済ベースで宗教行為を捉える価値観の広がりなど、さまざま

な要因が考えられます。もつとも、僧侶派遣に関してはお布施の問題も絡んでおり、その是非には議論があるでしょうが、葬儀や法事などの仏事の際には、僧侶による読経を多くの方が求められていると考えられます。

浄土真宗における葬送儀礼の「勤行」

の意義は、本願を信じ念仏するものとして、故人も後に遺されたものも、等しく阿弥陀如来に摂め取られていることに対する「報恩感謝」の思いからなされるものです。しかし、その仏恩報謝の思いよりなされる読経の「音声」そのものが、

悲しみのなかにおられる遺族の方々の想いとつながっていることも無視できない事実です。まさに儀礼のもつ「音力」が、悲嘆のうちいらつしやる方々の想いを支えていくと共に、「先立たれた方とのご縁」「故人と出あった人々とのご縁」「そして仏さまとのご縁」という3つのご縁を結ぶ、接点ともなっていくのではないのでしょうか。僧侶の側からすると、ご報謝の営みとして儀礼を執行すること

は当然のことかもしれませんが、遺族や近親者の方々からも誠実な勤行や作法が求められているのです。

■葬送儀礼における「法話」

葬祭業者への聞き取り調査のなか、「葬送儀礼のなかで僧侶に求められているものは何か？」という問いに対し、大半の方が「僧侶の方にはぜひ法話をしていただきたい」と回答されました。これは遺族の方々も含めて、僧侶には法話が期待されているとのことでした。

また、大阪教区では「葬送儀礼」に関するアンケート調査が実施されました。門信徒の方々を対象にしたアンケートでは、「通夜の際に法話はあった方が良くと思いますか？」の問いに対し、8割以上の方が「良いと思う」に回答されています。

法話は勿論「仏徳讃嘆」ですが、法話と一口にいっても専門用語を並べた型どおりの話に徹してしまつては、悲嘆のうちいらつしやる遺族の方々的心里に響か

ないばかりか、傷つけてしまうことにも
なりかねません。

遺族の方々が求められている法話の内容
には、葬祭業者の方々も含めて「故人
の思い出に触れて法話をしてほしい」
「故人の法名ほうみやうについても話してほしい」
といった声が多くあがりました。そして
このような遺族の想いに応こたえていかれる
僧侶の存在の報告もあります。例えば初
めてのご縁の方の葬儀であっても、事前
に遺族の方と連絡を取り、許可をいただ
ければ故人の生涯や人柄について教わ
り、法話に盛り込まれるといった取り組
みは、現場で遺族の方の想いと向き合
いながら行われている代表的な事例とい
えるでしょう。

葬送儀礼の法話には、「遺族の想いに
寄り添う面」と「阿弥陀如来のお慈悲じひを
お伝えする面」という大切な側面が存在
します。遺族の方々の想いに最大限心を
傾けながら、ともに阿弥陀如来に救われ
ていく身であるという、如来のお慈悲の
温ぬくもりをお伝えできる法話が求められて

います。

■おわりに

勤行にせよ法話にせよ、僧侶が発する
「音声」は、葬送儀礼の「場所」におい
て多様な影響力をもちます。いま行われ
ている葬送儀礼を、いかに充実させてい
くのが、今後の葬儀の在り方にも大き
く関わってまいります。遺族の方々の
「声」を真摯しんしに受けとめながら、僧侶が
葬送儀礼の現場にいかに関わっていくこ
とができるのか、そのことがいま改めて
問われているのではないのでしょうか。

今回の報告では、葬送儀礼の現状に関
して「場所」と「音声」から考察してき
ました。勤行・作法や法話、そして遺族
の方々との接し方など、普段行われてい
る行為がより意識されることで、葬送儀
礼のもつ宗教的な意味合いはさらに醸かし
出されていくのではないかと考えます。
こうした現場での地道な活動によって、
真宗の教えや考え方が各地域の「習俗」

(ならわし)として根付いていくことが
期待されています。

(浄土真宗本願寺派総合研究所 那須公昭、赤井智顕)

i 詳細は、『宗報』2015年1月号
「直葬の現状報告」参照。

ii PLESIDENT Online 「葬祭会館が増加
傾向、駅近やロードサイドに次々進出中」
(<http://president.jp/articles/-/17050>)

iii 秋庭隆編集『日本大百科全書』11巻
(小学館・1986年) 524頁参照。

iv 注 i 参照。

v 『浄土真宗本願寺派 葬儀規範——浄土
真宗の葬送儀礼——』(本願寺出版社) 9
頁参照。

vi 『大阪教区重点プロジェクト「葬送儀
礼」【資料】アンケート集計一覧』68頁
参照。